

〔書評〕 五十嵐誠一『民主化と市民社会の新地平 —— フィリピン政治のダイナミズム』⁽¹⁾

宮脇聡史

(東京基督教大学准教授)

近年の市民社会論の復興の中で、特に今世紀に入ってアジア諸国における市民社会に関する研究や議論は活発化している。フィリピンは特に NGO や教会など市民社会の活動が活発であるといつてよく、これまでその働きを評価する研究がいくつか出されてきたが、市民社会運動自体の中産階層的な性格を指摘し、その正当性を不問にするような論じ方への疑問を呈する声も聞こえるようになってきている。本稿は上記新刊書の書評を通じて、主にフィリピン政治の現状の課題を論じる。

本書は五十嵐誠一が早稲田大学大学院に提出した博士論文をもとにしている。五十嵐は比較政治学、民主化論の立場から、東南アジア諸国の民主化運動とそれを支える市民社会の特徴についての比較研究を進めつつ、特にフィリピンの NGO の活動についての研究を積み重ねてきたが、本書はその一つの集大成というべきものである。

内容の紹介

本書の構成は以下のとおりである。

第1部 理論編

第1章 分析概念の検討

第2章 分析枠組みの検討

第2部 事例編 (1) 民主主義体制への移行過程

第3章 フィリピン市民社会の歴史的変遷

第4章 民主化移行局面における市民社会

(1) 五十嵐誠一『民主化と市民社会の新地平——フィリピン政治のダイナミズム』早稲田大学出版部、2011年

| | |
|------|-----------------------|
| 第5章 | 民主化決定局面における市民社会 |
| 第3部 | 事例編 (2) 民主主義体制の定着過程 |
| 第6章 | アキノ政権以降の民主主義の実態 (1) |
| 第7章 | アキノ政権以降の民主主義の実態 (2) |
| 第8章 | アキノ政権以降の市民社会のエンパワーメント |
| 第9章 | 公明選挙と市民社会 |
| 第10章 | 農地改革と市民社会 |
| 第11章 | 都市貧困と市民社会 |
| 結論 | |

本書の理論的な課題は比較的明瞭で、二つに分かれる。一つは市民社会論についてであり、近年の市民社会論において、またフィリピン市民社会についての議論の中でも主流であったトクヴィル流の、中間層を軸として民主化や多元社会をはじめとする社会の共通善が推進されるというリベラルで静的な分析の限界を指摘し、市民社会内部のイデオロギー上の対立をはじめとするヘゲモニー（覇権）闘争の存在とそこから生まれる動態を重視するグラムシ的なラディカル市民社会論の重要性を指摘し、特にフィリピンにおける市民社会運動内部の対立、緊張と、その中から生まれる動態に注目すべきことを確認している。

もう一つは民主化論についてであるが、比較政治学における民主化論がしばしば狭義の民主化、すなわち民選の復活などの手続き的民主主義を対象としてきたことを批判し、開発途上国ではそれと並行して、人々の生活状況が平等性を増すようになる実質的民主主義の重要性を指摘する。また市民社会を単純に一枚岩でとらえる分析法を不十分とし、上記のとおり、市民社会を多様な傾向を持つ諸アクターの競合する場としてとらえることの重要性を指摘している。

第2部、第3部の事例研究はこうした理論的な関心に沿っており、比較政治学の民主化論に合わせて、民主化論、民主化移行論、民主化定着論という構成を受け継ぎながら、しかしその経緯の中にある市民社会の多元性と内部の緊張関係を丁寧かつ多彩に跡付けている。また、実質的民主主義を目指す運動をバランスよく配置するために、1986年の民主化後の市民社会の全般的な展開と合わせて、選挙監視と選挙教育、農地改革要求と支援、都市貧困層支援と幅広い事例を挙げてバランスよく論証しており、著者の並々ならぬ精力的な研究の成果を見ることができる。

批評

本書は驚くほど広範な資料を渉猟し、かつ幅広い現地調査を踏まえて、厚みと広がりのある市民社会論を展開している。内容の紹介でも述べたとおり、実質的民主主義を追求する市民運動の展開として、複数の 이슈に関する分析を組み合わせた点でも立体感がある。これまで単独の著者によって、都市と農村の両方を市民社会論の中でここまできちんと扱った研究は管見の限り見当たらない。こうした研究が可能なのはもちろんすでにフィリピン市民社会論についての多彩な研究の蓄積があることも確かであるが、それにしても著者の精力的な研究姿勢には頭が下がる。

また、「市民社会内部のヘゲモニーをめぐる競争」という近年取り上げられ始めた視角を積極的に取り入れたことで、市民社会運動の広がりや多面性がよくあらわされている。評者も現地滞在中で、またさまざまな見聞の中で市民社会が特に内部で運動している人たちやこの観念を普及させようとしている人たちが語るほど理想的なものでも一枚岩でもないことはよく知っていたし、本書が依拠しているいくつかの先駆的な市民社会研究には触れていたものの、本書ほど多くの団体や運動のさまざまなせめぎあいと政府とのかかわりについて総合的にまとめて書かれたものを読むのは初めてで、大変勉強になった。

評者にとって特に説得的であったのは、1986年の「フィリピン二月革命」と呼ばれる民主化の持つ意義についてである。この政変は長年の独裁政権を事実上無血の非暴力的な大衆行動で放逐した稀有なケースとして、リアルタイムで世界中で報道され、大きな反響をもたらしたが、その割に、その後のフィリピン政治は人権侵害の改善や貧困対策、公正な選挙制度などについて失望せざるを得ない状況が続いている、と言われている。しかし、本書においては、民主化の成果を乗っ取ろうとする地主を中心とした富裕層及び名望政治家に対する市民社会運動のさまざまな抵抗、及び法制度改革への粘り強い努力とその成果が跡付けられており、これもまた民主化があったればこそその成果であることが非常によくわかった。近隣諸国に比べるとき政治面でも経済面でも華々しい成果がなかなか現れないフィリピンは、むしろ植民地遺制としての法制度や行政制度の未整備と不適切性という不利な条件の中で、市民社会運動の戦いがあるからこそ、そしてその戦いのアリーナを可能にしている民主主義の制度形式あってこそ今がある、という側面を改めて確認することができた。

五十嵐はかつて『フィリピンの民主化と市民社会—移行・定着・発展の政治力

学』(成文堂、2004年)を世に問うたが、そこではまさにここで批判されているトクヴィル流のアプローチに偏した、市民社会を一枚岩的に捉えた単純化された議論が展開されていた。年月を経て五十嵐は民主化論という点においても理論を練り上げ、またフィリピン地域研究における成果と実情を踏まえて、広がりやダイナミックスのある研究成果を生み出した。特に日本語では類書がなく、おそらく発展途上国の民主化と市民運動に関する研究全般にとっても示唆するところの多いものであると思われる。

但し、残念ながら限界も指摘できる。例えば、名前の誤字や誤訳(とくに宗教関係のもの)がなお目立ち、フィリピン地域研究の立場からみると、問題なしとしない。名称の訳語の問題については、原語も並記されているため大きな傷ではないとはいえ残念である。もちろんフィリピン研究以外から、比較政治的な関心から読む場合は大きな傷ではないといつてよい。

市民社会内の対立を重視するアプローチは評価できるが、それをほぼ一義的にイデオロギー対立ととらえているのも、思想よりも人間関係が重視されやすいとされてきたフィリピンの分析としては違和感が残る。また民族民主主義、社会民主主義、自由主義などのイデオロギー及びその名を冠した運動自体の特徴についての説明がほとんどないのも弱いところと思われる。

評者から見て最も重大な課題は、「市民社会」からはみ出した貧しい庶民と市民社会との間の緊張関係や駆け引きが見えず、むしろ市民社会の内的な対立は描かれるが、なお市民社会がそれ自身でひとつの完結したものとして描かれており、それでは市民社会に対する過大評価の恨みが残る点である。これに対し、例えば木場紗綾の博士論文⁽²⁾におけるプリンシパル=エイジェンシー関係の中での住民組織、NGO、政治家、行政の間の是々非々の交渉関係にみられるように、NGOというものの本性上、住民側を十分代表するなどということはほとんどありえないこと、また住民組織側が主体性を発揮して周辺の関連団体と緊張関係のある適宜是々非々の関係を築きながら情報を集め、適切な対応をできることの重要性が指摘される。その中で、公共領域の中でのNGOを中心とした「市民社会」の位置づけそのものもまた、本書で重視されているイデオロギーの相違に基づくものとは異なる、利害の相違を軸としたヘゲモニー闘争を視野に入れられないといけなしいと思われる。本書は市

(2) 木場紗綾「スラムの住民運動と外部者―フィリピン・マニラ首都圏の事例から」神戸大学、2010年 (<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/thesis/d1/D1004820.pdf>)

民社会の中立性という幻想を批判すべく努めているが、なお一層の相対化の中でこそ、初めてフィリピンの市民社会、ひいては開発途上国の市民社会の位置づけや評価がより適切に行われるのではないかと思う。開発途上国においては特に、市民運動を安定的に継続できるのはやはりある程度経済力のある人たちが多いということ、そして特定の社会層の出身者の多い運動が、その出自に基づく利害関係を引きずることは大いにある、ということは頭に入れておくべきことであろう。

また、名称の翻訳に一貫性がなかったり、略称が乱発されていたりと読みづらさがあり、編集者が十分なチェックを行っていないように見えるのは極めて残念である。比較政治学的な視点をふんだんに盛り込み、フィリピン研究以外にこそ有用性が高そうな本だけになおさらである。好著であるだけに、編集担当者の一層の努力を望みたいところである。

おわりに

翻って日本の政治と市民社会を思うと眩暈がする。日本の行政の水準はフィリピンと比べて著しく高いにもかかわらず、国民の間に広範な不満、不安、不信が鬱積している。とはいえ、市民活動の停滞もまた著しい。フィリピンにおける行政水準の低さ、市民活動の活発さ、不満はあれどもまあハッピーな人々の姿と対照的である。また日本の場合、「市民社会」や「市民運動」に左翼的なイメージが強く、さらにこうした活動を代弁する人たちがその印象を補強するような発言を繰り返すため、結果として市民運動は左翼に乗っ取られるというか、それ以外の人たちがなかなか寄り付かないというか、そういうことになってしまう。

一方でそれなりに整った日本の行政に感謝すべき面もあるだろうが、他方で、多様な勢力が主導権を競いつつ多彩な議論を展開するような新しい市民社会の在り方を生み出していくことも、今を生きるだけでなく、将来に展望ある日本の政治社会の革新のためには不可欠に思える。左翼も右翼も議論よりも同調圧力を好むような現状の日本の政治の語りの雰囲気の中では、一般に欧米では限界があるといわれつつある多元主義的なあり方こそ、まずは日本の言論界、市民活動、そしてキリスト教界にも必要なのではないかと思われる。